

永眠者記念礼拝 2020年10月4日（日）

題 「今がどんな時か」

テキスト：ローマへの信徒への手紙13章：11～14節
（聖書の箇所は最後にあります。）

10月第1の主日は日本キリスト教団では「世界聖餐日・世界宣教の日」とされています。共に主の聖餐に与り、かつて日本に来られた宣教師の方々や今働いておられる方々日本から世界に出向いておられる宣教師の方々のことを覚えたいと思います。わたしは主イエスの十字架が世界に、特に日本に根付きますように。愛と自由、正義と良心が根付きますように、そのためにわたしたちが用いられるようにと祈っています。

さて、今日の聖書箇所は、初代教会の教父でキリスト教の歴史に大きな影響を与えたアウグスティヌスが回心した時に会った聖書箇所ということで有名な箇所です。

少し、長いですが大切な出来事だと思いますので、ご存じの方もおられると思いますが紹介させていただきます。

故相沢建司牧師が「アウグスティヌスの回心」の出来事について遺稿説教原稿で語られている箇所を引用したいと思います。

「古代ローマの最も偉大な神学者アウグスティヌス（354～430）は、北アフリカのヌミディア（今のチュニジア）の町タガステで生まれた。父は町の中流の地主、母は敬虔なキリスト教徒で「賢母」として知られるモニカ。アウグスティヌスの著作は膨大で特に信仰的自伝「告白」（400、山田晶訳）や「神の国」（426）などはよく知られている（いずれも翻訳が岩波文庫にある）。

アウグスティヌスの回心の経緯は「告白」に詳しい。

彼が学んでいた大学のあるカルタゴは、当時ローマ帝国の中でも大都市で、経済的に繁栄し文化は栄え学問研究も盛んであった（三世紀のテルリアヌスはカルタゴの人である）。他方、性風俗は乱れていた。男子は17・8才になると愛人と同棲する習慣であった。相澤牧師は、私は学生時代からアウグスティヌスにひかれていたが、それは彼が「情欲の問題」で悩んだ人物だったからである。私はそこに自分の問題と似たものを感じてきた。と言われます。

16才のころをふり返って、アウグスティヌスはこう述べている「齢（よわい）一六の時、私は汚れた人間の風習によって放任されているが、あなたの法（神）によっては許されていない凶暴な情欲が全権をふるい、私は完全に屈伏してしまいました。家の者は墮落して行く私を正当な婚姻で抑えようとは配慮しませ

んでした」。彼は16才の大学生の時、カルタゴで出会ったある女性と同棲し、2年後には子まで生まれ、15年間連れ添った。

大学では2年間哲学、修辞学、弁論術を学び故郷にもどり哲学の教師をし、後にはカルタゴで29才まで哲学を教えた。

母モニカからは小さいころからキリスト教について教えられていた。

・・・この時期の「霊と肉との闘争」のすさまじさ、情欲にとらわれた自分のみじめさについては次のように書いている（これも31才のころである）。

「私をとらえて離さなかったのは『古（ふる）なじみの女ども』（情欲の象徴）であり、私の肉の衣をひっぱってこうささやくのでした。『あなたは私たちを捨てるつもり？ そうしたらあなたはあのことも、このこともできなくなるのよ』。…私は『彼女たち』を払いのけようとしてしましたが、その手を振り切って（神の）呼ばれる方向に飛び移るのをためらっていました」（8・11）。

回心。彼はそのころミラノの友人のもとに引きこもって生活をしていた。彼は肉欲の思いを断ち切れない自分にひどく悲しみ、涙にくれていた。

「すると、どうでしょう。隣の家から繰り返し歌うような調子で少年か少女か知りませんが『とれ、よめ。とれ、よめ』という声が聞こえてきたのです。

私はどっとあふれる涙をおさえて立ち上がりました。これは聖書をひらいて、最初に目にとまった章句を読み、との神の命令にちがいないと解釈したのです。そこで私は急いで友人のすわっていた場所にもどりました。そこに使徒の書を置いてあったのです。それをとって最初に目にふれた章句を黙って読みました。

『宴楽と泥酔、淫乱と好色、争いと嫉み（そねみ）を捨てよ。主イエス・キリストを着よ。肉欲を満たすことに心を向けるな』（使徒パウロ、ロマ13：13～14の要約と思えます。）。

（この聖書の訳は「告白」の本の中で使われている訳だと思われます。）

「この節を読み終わった瞬間、いわば安らぎの光とでもいったものが、心の中に注ぎこまれてきて、すべての疑いの闇は消え失せてしまったのです」（8・12）。

子供たちの遊びの歌声「とれ、よめ（取れ、読め）」は彼にはある種の「靈感」として作用したが、彼はそれを「神の命令」と解した。有名なこの劇的な回心は、32才の時のことであつた。彼はこの「告白」の冒頭で神についてこう述べた、「あなたは私たちをあなたにむけてお造りになりました。それゆえ私たちの心はあなたに憩うまでは安きを得ることができないのです」（1・1）。

アウグステイヌスは十数年間にわたる長い長い苦闘のすえに、やっと「彼の心が神に憩う安らぎを体験した」といえよう。彼はアンブロシウスから洗礼を受けた。」 以上です。

アウグスチヌスは回心、つまり心をすべて神に向け委ね、他の何を持ってしても受けることのできなかった全き平安を受けることができたのです。自分の心を一番深いところでしばりつけていた力から解放され自由と平安を得たのです。これば私たちにも起こりえる神さまからの恵みの賜物です。」と。語ってくださっています。いかがでしょうか。わたしを含めてそれぞれに想わされること、今でも悩み苦しんでいる心の闘いは人それぞれにあるのではないのでしょうか。

ところで、今日の聖書の11節で伝道者、宣教者パウロは「更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。」と呼びかけています。この「時」とはカイロスということばで、神の時の意味です。すべての事には時があると言われます。神が事を起こされる時ということです。その時は海の波のように迫って来るのです。

パウロは神が、この世界を作り替え、世界、宇宙的な規模で救いを完成される終末の時がやがて来ることを信じ、期待しうきうきするような思いで熱烈に待望していました。しかし、熱狂的ではなく、生活は落ち着いて、慎み深く耐え忍んで、キリストにある希望に生きていたのです。これがこの世にあるキリスト者の生き方であると思われます。

「14:主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。」これは命令でも、強制でもなく、イエスさまの十字架の愛をたっぷりと受け入れ、キリストを身にまとう生き方への勧めです。キリストを着る、キリストを身にまとう、とは、ガラテヤの信徒への手紙3章27節以下によれば、キリストに心がつながる、しっかりと結ばれる、キリストと一つとなるということを意味しています。

このことは、自分の力だけでできるということではなく、神さまの力を受けることによって、キリストの美しい衣を着て包まれているかのように、品位を持って光の中を生きて行けるということです。そうして心して願って生きて行けば、人間は自分の心を昔からしつこく支配し、しばりつけていた、自分でも気づくことのなかった根深い欲望からいつかついに解放され、全き平安を得て生きて行けるという約束でもあると思えます。

ある聖書の訳では、ここの個所の見出しに「生き方を改めるのは、今がチャンス」とつけられています。わたしたちは、神さまから今日与えられたチャンスをしっかりとつかんで、これ以上ないキリストの衣を心に着て生きて行きたいと願います。

11:更に、あなたがたは今がどんな時であることを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。

12:夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。

13:日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、

14:主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。